

特別編・前編

こんにちは。塾長の大井です。

授業に影響のない小4クラスにはお伝えしていませんでしたが、去る10月12日、祖父が95歳で逝去いたしました。

小6、小5の保護者様からは、思いがけず本当にたくさんのメッセージを頂き、感謝の念に堪えません。

ご夫婦ご本人ご家族全員から送って下さった方、私の指導のルーツに敬意を示して下さった方、ご自身の哀別のお話を下さった方、そのどれもにあたたかいお心遣いを感じ、葬儀を前にして胸に迫るものがありました。

わざわざTOPに足をお運びになって直接追悼のお言葉を下さった方々もいて、感激いたしました。

TOPが多くの方の想いに支えられている特別な場所であることを、改めて実感する機会となりました。

はなはだ個人的な手記になりますが、この機会に祖父の人となりや人生について語ることをお許し下さい。

直接的にはなくとも、お子さんたちにとって、きっと意味があると感じてのことです。

ご笑覧下されば幸いです。

懸命に生ぬいた祖父に捧ぐ・・・

「祖父の本棚。」～前編～

幸いなことに、僕は記憶の始まりから、祖父母の存在を色濃く感じながら育つことができた。間違いなく家族の次に近い存在だった。

祖父は、彼を知るあらゆる人が口を揃えて言う通りの人だ。

実があり、虚がなく、声を荒げず、高ぶらない、私心なき高潔な人だ。

その努力で培われた類い稀な英才を、己のためでなく、名誉のためでもなく、同じ町に生きる人たちの医療にのみ捧げた。愛する妻のためだけに捧げた。

僕は年を重ねるごとに、この祖父の大きさを、人としての途方もない器を、少しずつ感じられるようになった。

きっとこれからもっと実感していくことになるのだろう。

祖父の目には僕はどんな風に映っていたのだろう。

きっと、ただ無邪気で幼い次男坊に映っていたことだろう。

小さな頃から、本が好きだった僕は、よく祖父の本棚の本を読んだ。

「どれでも持って行っていい。」

その言葉に甘えて読み耽ったたくさんの本。

山本周五郎、司馬遼太郎、大江健三郎、山岡荘八。

僕は、自分で買う本とも、図書館で借りる本ともちがう、祖父の存在に抱かれながら、その本のページをめくった。それは、何か個人的な読書を超えた、共同の営みであったように思う。寡黙で多くを語らなかった祖父と、それでも僕は、その本たちを通して、多くのことを語り合ったような気がする。

僕が選んだ本の作者たちは、示し合わせたように、みんな実があり、人間への愛に溢れていた。今思うとそれは、祖父の人となりそのものであったのかもしれない。

そして、この読書が自分の一生涯の仕事への架け橋となっている。

医療と教育。

祖父と全く違う道を選んだ僕だったが、祖父の生き方から多くのことを学んだ。祖父は無口で物静かだったが、とても芯の強い人だった。

自分の人生にふりかかる全てを受け入れ、それを全力で愛した。

僕は10年間の大手進学塾勤務を経て、祖父と同じく独立という選択をすることになる。

神楽坂に「難関中学受験専門塾 TOP」を開校したのは、図らずも祖父が自身の医院を開業したのと同じ歳だ。

祖父は、ただの甘えんぼうだった僕が、地域の子どもの未来を拓く教育者としての人生を選んだことを、心の底から喜んでくれた。

(次回につづく)

2018年10月22日

大井雄之